

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2006～2008  
課題番号：18560637  
研究課題名（和文） 南北朝期を中心とした武家住宅形成史の研究

研究課題名（英文）

研究代表者

藤田 盟児（FUJITA MEIJI）  
広島国際大学・工学部・教授  
研究者番号：20249973

研究成果の概要：

従来、書院造とよばれる和室の住宅様式は、室町後期から江戸時代初期にかけて、平安貴族の住宅様式であった寝殿造から変化してうまれたとされてきたが、本研究により書院造は鎌倉時代の都市鎌倉における上層武家住宅からうまれた住宅様式である可能性が高いことが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：建築史、住宅様式、武家住宅、座敷、書院造り、南北朝

#### 1. 研究開始当初の背景

日本住宅史の分野で、これまで和室とも呼ばれる書院造りは、古代の貴族住宅の様式であった寝殿造りが、中世に変化し、中世後期から近世初期にかけてできたものとされてきた。

その一方で、鎌倉時代の武家住宅は、公家の影響を受けて寝殿造りへと変化し、その後に書院造になるとされてきた。

しかし、発掘調査が示すように鎌倉時代の中ごろから、都市鎌倉ではしだいに礎石建化した上層武家住宅が、本当に寝殿造りに類似した様式となり、その後に書院造へ変化し

たのかどうかは、鎌倉時代後半から室町時代初期までの、いわゆる南北朝期を中心とした時期の武家住宅の研究がすすんでいなかったために不審であった。

そこで、当研究では、その時期の武家住宅の実態を検討して、これまでの上述のような通説が正しいかどうかを検証する。

#### 2. 研究の目的

（1） 鎌倉時代からしだいに礎石建となり、室町時代には書院造りの住宅へと変化してゆくとされる上層武家住宅の実態を、史料や

発掘遺構に即して可能な限り明らかにし、その形成過程を考察する。

(2) 発掘遺構などから知られる武家住宅の平面形に、史料から知られる意匠的特色を反映させ、それが通説のごとく本当に意匠的にみて寝殿造りとみなすべきものかどうかを検討し、日本住宅の様式史について再考する。

### 3. 研究の方法

(1) 南北朝期を中心とする鎌倉時代から室町時代までの武家住宅に関する史料を収集し、それを邸宅ごと、もしくは階層ごとに整理して、前者からは各邸宅の施設について史料的に判明する点を明らかにする。また、後者からは武家住宅の階層的特色と、その変遷理由について考察する。

(2) 南北朝期を中心とした武家住宅の発掘遺構を調査して、武家住宅遺構の全体的な傾向と特色を明らかにする。とくに配置計画の特色と、基礎構造(掘立柱、礎石建)の分布域とその変遷過程について検討する。

(3) 当該期の上層武家住宅から最も史料が豊富な事例を選んで、その意匠的特色を明確化し、ついで南北朝期の代表的な武家住宅遺構を選んで、それに検討した意匠的特色を反映させたCGを作成し、その外観、内観を視覚的に確認しながら疑問点や修正案の妥当性を考察し、それを文献史的研究の視点にフィードバックする。

### 4. 研究成果

(1) 鎌倉時代初期までは、上層武家住宅であっても掘立柱建物であったが、すでに主屋の南面に、接客用の部屋であるデイ(客亭・出居)を設置する伝統があったことが判明した。

それは、平安時代末期の在地領主の館から存在していたことが推測され、かつ10世紀から11世紀ころの公家住宅に関係していた可能性があること等が判明した。

(2) 北条泰時が執権であった嘉禎2年(1236)に、泰時によって新造された鎌倉の小町邸において、はじめて檜皮葺で礎石建の「寝殿」が、将軍の御成用に建設されたことが判明した。これ以後は、そうした構造・意匠の建物が上層武家住宅に普及もしくは影響を与えたことが推測される。

(3) 北条時頼が執権であった宝治元年(1247)に新造された大倉邸において、初めて上述の御成用の「寝殿」よりも、伝統

的に武家住宅に存在していたデイを中心とする主屋を重視する傾向が明瞭になった。

このデイがある主屋は、寄合と呼ばれる会合のための建物であり、会合のための部屋であるデイがあり、寝殿造りの影響を受けた中門廊もあったと推定された。

(4) 1240年ころの制作とされる「六波羅殿御家訓」と、1260年ころの制作とされる「極楽寺殿御消息」の比較により、座敷とそこでの作法は、1250年前後に確立していた可能性が高いことが判明した。

これに関連して康元元年(1256)に時頼と重時が出家した後の上層武家住宅史料である北条政村の常盤別邸や小町邸と、出家後の重時の住宅であった赤橋殿では、そうした座敷をそなえた出居と呼ばれる建物が、「寝殿」に代わる御成用御殿として使用されるようになったことも判明した。

(5) 1250年ころに都市鎌倉の最上層の武家住宅で確立された「座敷」をもつ武家住宅は、13世紀後半には出居と呼ばれる接客室もしくは建物を中心施設とし、礎石建てで、畳を追い廻しに敷き、引違戸を立て回して、天井を貼った建築として、鎌倉の中では普及し、同時に会所と呼ばれる建物も出現していたことが判明した。

また、これらは書院造という住宅様式の範疇に入る建築であったと判断されるので、書院造は13世紀中期に鎌倉で成立したことが判明した。

(6) 鎌倉後期から南北朝期にかけての都市鎌倉における武家住宅遺構を検討し、それらを代表する今小路西遺跡(御成小学校)の武家住宅遺構をCG化した(図1・2・3参照)。

そうした鎌倉の武家住宅は、畳を敷くのに適した7尺等間の柱間寸法に礎石を配置した礎石建てで計画されており、南面する部屋のうち中央か奥の部屋をデイと呼ばれる接客用の座敷としていたと推定される。

ただし、地頭クラスの住宅建築は、都市鎌倉でもたとえば笹目ヶ谷遺跡の遺構のように、掘立柱で、板壁を地中に一部埋め込んだ形式で建てられており、平面上でも一部に土間があるなど、後世の上層民家に継承される形式であったことが判明した。

(7) 南北朝期の全国における在地領主の住宅遺構を検討すると、たいいては掘立柱であり、方形居館と呼ばれる形式であることが判明した。

北は仙台平野、南は阿蘇山麓に至るまでほぼ同類の建物であり、地域によって特に時期差が認められないことが判明し、被官屋敷等

を付属させる配置形式や、堀の規模・形状などから、それらが後世の庄屋階層の住宅形式になると推定された。



図1、今小路西遺跡復元CG全体図



図2、今小路西遺跡復元CG・北側屋敷奥部分



図3、今小路西遺跡復元CG・南側屋敷部分

一方、14世紀と推定される京都の久我東遺跡では、守護方の被官屋敷と推定される遺構で礎石建ての武家住宅遺構が検出されており、南北朝期になると上述の鎌倉時代の鎌倉で出現した礎石建ての書院造りの住宅様式が、在京することになった武家住宅へと継承されたことが判明した。

(8) 同時代の絵画史料や文献史料を検討した結果、南北朝以前には上層武家住宅のほ

かには、寺家・公家の下層の住宅にしか書院造りの住宅建築の意匠が認められないことが判明した。

また、そうした公家・寺家の下層住宅のうちには接客座敷を中心とする住宅建築が認められず、寺家であれば仏間、公家であれば寝殿造りの形式を受け継ぐ南面が中心となり、接客室はその周囲の庇などに設置されていると推定されたことから、上述のように接客用の座敷を中心とする住宅様式つまり書院造りは、鎌倉の上層武家住宅を起源とするものである可能性が高いことが判明した。

(9) 書院造住宅は、南北朝期以後になって、ようやく上層の寺家・公家住宅へも少しずつ転移していく。そのことが南北朝期を挟んで前後の同階層の住宅建築である、たとえば鎌倉後期の愛宕坊や十楽院と、室町前期の常楽伽院とを比較することで確認できた。

つまり室町時代になると、書院造りの意匠が、寺家・公家住宅でも上層のものに使用されるようになるが、このことから従来の研究で明らかにされてきた上層公家住宅における寝殿造りの残存の多さと、書院造化が室町時代後期まで遅れる現象は、書院造りという様式が支配階層の下層から普及したことによって出現する現象であることが判明した。

よって、書院造の成立を室町時代後期以後とする従来の通説は誤りであることが判明し、かつ従来の寺家・公家住宅の位置づけや変遷過程は、こうした視点のもとに再編されなければならないことも明らかになった。

(10) 15世紀の京都近郊や中国地方の山間部で作成された史料の検討から、当該地方の在地領主の住宅は、基礎構造はまだ掘立柱でありながらも、すでに接客用の座敷をそなえ、かつ「主殿」と呼ばれる支配者階層の住宅形式として認知されるようなものになっていたことが判明した。

これらは接客座敷と、その成立により規定される書院造という住宅様式が、基礎構造や細部意匠によって規定されるものではなく、用途とそのため空間として規定され、座の空間様式として再定義される必要があることを意味し、いわゆる民家とよばれる建築も最初から書院造と密接な関係をもっており、通説のように近世になってから武家住宅の影響を受けて座敷を導入したのではないことを推測させるので、民家史の見直しも必要なことが判明した。

以上のことは、今後の研究課題と住宅史の再考の必要性、そして上層住宅と民家の関係を捉えなおすことまで要求する事実であるが、それは今後の課題としたい。

(11) 室町時代から戦国時代末期まで書院造の住宅建築の中心となる建築類型として「主殿」があるが、これは上層武家住宅を中心にしながら、中下層の寺家公家住宅の意匠を取り入れ、かつ掘立柱の在地領主の住宅とも不可分の関係を保ちつつ形成されたことが明らかになった。

よって主殿の形成過程とその意義を検討した前回の科研の成果は、この視点から再考されるべきだと考え、武家住宅を中心とした主殿の成立過程を考察して、鎌倉と京都で行われたシンポジウムで発表した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

藤田盟児、鎌倉前半期における上層武家住宅の実態と変遷過程、建築史学、第53号(2009年9月掲載予定)、査読有り

[その他]

シンポジウム発表 (計 2 件)

① 藤田盟児、寝殿造から書院造へー鎌倉武家住宅の実態とその意義ー、シンポジウム：日本の住様式～寝殿造から書院造へ～、京都女子大学、2007年12月15日

② 藤田盟児、武家住宅史料よりみた今小路西遺跡、シンポジウム：鎌倉の建築と都市ー建築史学と考古学の対話からー、鎌倉商工会議所ホール、2007年10月6日～7日

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 盟児 (FUJITA MEIJI)  
広島国際大学・工学部・教授  
研究者番号：20249973

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし